

令和2年度 第1回教育課程編成委員会（柔道整復学科）議事録

【日時】 令和2年9月15日（火） 16:00～17:00

【場所】 日本医学柔整鍼灸専門学校 ZOOM 開催

【出席】 委員 佐藤 和伸（佐藤代田接骨院 院長）

加瀬 剛 （キネシオ接骨院 院長）

小泉 利幸（三進興産 営業部長）

学校 奥田 久幸（校長）

岸本 光正（副校長）

木下 美聡（フロンティア推進部長）

伊藤 恵里（副学科長）

鴨田 佳典（柔道整復学科教員）

事務局 大友 員彦（事務部長代行）

小浜 悠樹 兼子 啓太郎 浅井理英 川上英史 圓乗佑太 伊藤真紀（議事録）

以上 15 名

【欠席】 委員 伊藤 述史（公益社団法人東京都柔道整復師会会長）

道狭 浩子（ひろ子整骨治療室 院長）

【議題】

コロナ禍における臨床実習の実施対策

（委員の意見／質問）

介護施設での臨床実習ができなくなったが、代替案を考えなくてよいのか？

（学校の回答）

代替案については現在手配中である。

（委員の質問）

もし、実習中に学校でクラスターが発生した場合、実習先での濃厚接触や規定はあるのか？また、受け入れている治療院がクローズになる可能性はあるのか？

（学校の回答）

基本的には保健所の指示に従う。現在の状況では受け入れ院に影響がでる可能性もあるため、発生し

た場合の対策を検討する。

(委員の質問)

クラスターが発生した場合や濃厚接触者が発生した場合、該当の実習先にすぐに連絡をくれるのか？保健所の回答を待っていると発生からかなりタイムラグがあると思うが、どのような対応を考えているのか？

(学校の回答)

現在、未定なので学内で検討していく。

(学校からの質問)

外部実習について当校としては実施していきたいと考えているが、先生方の院では受け入れてくださるのか？

(委員の回答)

現状では受け入れていくつもりである。

(委員の意見／質問)

授業がオンラインになって学生の学習の定着度に差がでてくると思う。従来であれば補講等を実施していると思うがどのような対策をとっているのか？

(学校の回答)

1期はオンラインで補習を行っていたが、低学力の学生は参加しない学生が多い。現在は登校日（週に1日）に声がけをしている。教員はやはり登校して対面で補講したほうが学習効果は高いと感じている。感染防止対策を講じて登校して受講するよう指導していきたい。国試対策についても低学力者については登校して補講を受けるように促し、そのほかの学生にはオンラインでの補講を実施している。

(学校からの質問)

本校の付属治療院での実施を代替案について検討をしているが、この他にあるか。

(委員の回答)

学生にとって「臨床実習」をする最大のメリットは各治療院でどんなことをやっているのかを確認できることだと思う。各治療院との連携や患者の協力が必要ではあるが、「来院～検査～施術」の流れをビデオで撮影することができると、学生は複数の院の特徴や施術までの流れをバーチャルで学ぶことができるのではないかと。コロナ禍であるからこそ、様々な方法を検討してみてもよいと思う。

以上

令和2年度 第1回教育課程編成委員会（鍼灸学科）議事録

【日時】令和2年9月24日（木） 14:00～15:00

【場所】日本医学柔整鍼灸専門学校 ZOOM 開催

【出席】委員 前田 真也（カリスタ㈱ 代表取締役）

鈴木 幸次郎（天心堂鍼灸院 院長）

藤原 良次（㈱アールエフ 代表取締役）

学校 奥田 久幸（校長）

岸本 光正（副校長）

青木 春美（学科長）

中村 幹佑（教務委員長）

天野 陽介（学生委員長）

事務局 大友 員彦（事務部長代行）

小浜 悠樹 兼子 啓太郎 浅井理英 川上英史 圓乗佑太 伊藤真紀（議事録）

以上 15 名

【欠席】委員 高島 風香（カリスタ㈱ 執行役員）

【議題】

1. 本年度のオンライン実施対策について取り組みを共有した。

（委員の意見／質問）

企画から実施まで大変緻密に実施していることがよくわかった。入学検討者は大変気になる点でもあるので、実施したプロセスをぜひ広報活動に活用してはいかがか。

（学校の回答）

文部科学省（文部科学省総合教育政策局 生涯学習推進課専修学校教育振興室）にご依頼をいただき文部科学省のホームページ『新型コロナウイルス感染症対応に係る 専修学校における 遠隔授業の取組事例集』にて掲載されており、同ホームページ『5分でわかる実践映像』専修学校の遠隔授業オンラインセミナーにも紹介されている。

（委員の質問）

他校のキャリア支援担当者から「学生とのコミュニケーションが取れない」という声を聴くが、御校ではどうか。

(学校の回答)

就職活動を優先する3年生に限り「完全予約制」の来所面談を実施している。1、2年生はまず、Zoomまたは電話相談を案内している。来所時はマスクの着用、検温・消毒などの対策を徹底している。また、ZOOMを活用したオンラインキャリアイベント「卒業生とのZoom座談会」を企画し、できることを工夫して実施している。

(委員の質問)

学校とは「教える」「はぐくむ」場所であると考え。オンライン授業で授業はできると思うが、(柔道整復学科昼間部の学生の中には登校を希望している学生もいるとの報告を受け)学校から心が離れてしまうのではないか。

(学校の回答)

実技授業は原則登校して受講することになっており、補講も同日に実施している。

感染防止対策をしたうえで、学生同士の学び合いや積極的に教員も学生と交流を図るようにしている。

(委員からの質問)

学生への連絡手段はどのようにおこなっているのか？

(委員の回答)

本校が採用している就職支援サイト「キャリアマップ」のメッセージ機能を使用して学生やクラスに連絡を周知している。また、休校期間中は学費、教務、就職、各学科別のメールでの問い合わせ対応をおこなった。

以上

令和2年度 第2回教育課程編成委員会（柔道整復学科）議事録

【日時】 令和3年2月16日（火） 16:00～17:00

【場所】 日本医学柔整鍼灸専門学校 ZOOM開催

【出席】 委員 佐藤 和伸（佐藤代田接骨院 院長）

加瀬 剛 （キネシオ接骨院 院長）

道狭 浩子（ひろ子整骨治療室 院長）

学校 奥田 久幸（校長）

岸本 光正（副校長）

木下 美聡（フロンティア推進部長）

伊藤 恵里（副学科長）

西村 優一（柔道整復学科教員）

鴨田 佳典（柔道整復学科教員）

森下 友雄（柔道整復学科教員）

事務局 大友 員彦（事務部長代行）

小浜 悠樹 兼子 啓太郎 川上英史 圓乗佑太 伊藤真紀（議事録）

以上16名

【欠席】 委員 伊藤 述史（公益社団法人東京都柔道整復師会会長）

小泉 利幸（三進興産 営業部長）

【議題】 カリキュラム改定と新カリキュラム作成について

カリキュラム改定にあたり、その概要を説明したうえで、本校のDP(ディプロマポリシー)に基づき、CP(カリキュラムポリシー)を設定していること、また各科目の立ち位置や関係性、重複点、適切な学習年次などを再度見直し調整しながら、新カリキュラム編成をしていることを報告した。

新カリキュラム作成の目的として「科学的思考に基づいた判断能力とリスクマネジメント能力を身につけ、自ら問題を発見し、その解決のための実践力を養う学生を輩出するために改定を行う」ためとした。「超音波観察」と「高齢者対応について」以下のとおり説明した。

1. 「超音波観察」

①まずは、超音波観察装置の基本を学ぶ（走査方法；短軸走査、長軸走査など）

②柔道整復学の授業で行う（柔道整復実技、臨床実習などでも使用できるように整備していく）

- ・肩関節（腱板損傷、肩峰下滑液包炎、石灰沈着性腱板炎）
- ・肘関節（離断性骨軟骨炎、肘関節内の血腫・水腫）
- ・指（基節骨骨折、靭帯損傷）などの疾患を判別できるようにする

- ③実技の各授業内でもできる限り利用できるように検討する
（現在は機器台数が少ないため今すぐには難しいが2022年度には少しでも増やせていけるように検討）
- ④放課後での教員立会いのもと観察練習を実施する
- ⑤ゼミ等でも使える機会があれば、使用していく
- 以上のように、なるべく多くの機会を準備し、観察装置に触る機会を増やしていくことを目指す。

2. 「高齢者対応」

- ①柔道整復学講義（高齢者の身体特性と一般介護概論）を行う
- ②生理学内で高齢者の生理学的特性を学習する
- ③高齢者ケアゼミ内で、機能訓練指導員を目指す学生への対応を行う
- ④臨床実習内で、現場体験を行う
- ※カリキュラムMap作成により、①②③④の役割分担を明確化し、3年間を通じて無理ない学習効果を目指す。

（委員からの質問）

超音波観察装置はどのくらい用意されているのか。また何人くらいで共有するのか。また、何時間かけて学習するのか。

（学校からの回答）

5台の用意がある。1台につき5.6名程度で共有して学習する予定である。約6.7時間の学習時間を設定している。

（委員からの意見）

日整においても各都道府県の選抜メンバーを集め「匠の技」という研修会を実施しているが、1台につき5.6名程度で共有して学習する方法で適切だと思う。

また、使いこなすことはもちろん、正しく観察すること自体が難しい装置であると思うので、学習のレベルを設定したほうがよいと思う。

（学校からの回答）

具体的な疾患に合わせてどのように当てて見れば適切なのか学習できるようにする。

（委員からの質問）

物理療法は今後カリキュラムに取り入れていくのか？また、学校の中には器具がそろっていない学校もあると聞かすが、対応はできそうか。

（学校からの回答）

1年生は手技療法と物理療法の概論、2年生でも少し触れるが何アンペアでどのくらいの時間かけるのか、ということまでは教えられていない。今後検討していく。また十分な器具を用意できるよう2022年度予算編成時に検討したい。

（委員からの意見）

物理療法について「決まりや禁止事項」を教えるのはもちろんだが、実習の場でも学ぶことはできると思うので、計画目標などに具体的に入れたほうがよいのではないか？

（学校からの回答）

1年次は付属接骨院や臨床実習でも見ることはできる。事前に実習時の確認項目に入れておくようにしたい。

(委員からの意見)

高齢者対応については柔道整復師になるために学んだ「体のしくみ」が非常に大切である。「この体操をすれば転倒しないようになる」といったような浅い知識ではなく、この筋肉がどのような運動をするのか、またその筋肉を鍛えることによりなぜ転倒しないようになるのかをきちんと理解した機能訓練指導員となることができると思う。

(学校からの回答)

柔道整復学と合わせて運動学、生理・解剖学にも注力して指導していきたいと思う。

(学校からの質問)

機能訓練指導員としてケアマネジャーと連携するポイントはあるのか？

(委員からの回答)

機能訓練指導員として橋渡し役をすることは大切なことではあるが、カルテを作成すること、帳票類を作成することができるということが大変重要なことになってくる。そのようなスキルが必要になってくることについても理解しておいていただきたい。

(学校からの回答)

以前、実習先の先生にも同じようなご意見を頂戴したので、今後検討していきたいと思う。

以上

令和2年度 第2回教育課程編成委員会（鍼灸学科）議事録

【日時】 令和3年2月25日（木） 14:00～15:00

【場所】 日本医学柔整鍼灸専門学校 ZOOM開催

【出席】 委員 前田 真也 （カリスタ株式会社 代表取締役）

鈴木 幸次郎（天心堂鍼灸院 院長）

藤原 良次 （株式会社アールエフ 代表取締役）

松田 博公 （日本伝統鍼灸学会顧問）

寺裏 誠司（株式会社 学び 代表取締役）

学校 奥田 久幸（校長）

岸本 光正（副校長）

青木 春美（学科長）

天野 陽介（鍼灸学科教員）

中村 幹佑（鍼灸学科教員）

渡邊 靖弘（鍼灸学科教員）

事務局 大友 員彦（事務部長代行）

小浜 悠樹 兼子 啓太郎 川上 英史 圓乗 佑太 伊藤 真紀（議事録）

以上17名

【議題】

今年度、臨床実習では学習到達状況を確認するためにルーブリック評価表を導入し、学生の自己評価および教員による評価を行ったが、目立って自己評価が低い項目に「東洋医学的身体診察」があった。この原因として、以下の3点が考えられる。

- ・学習時間が少ない
- ・東洋医学的身体診察に関わる7科目に一貫性、連携がない
- ・聞いたこと、やったことはあるが、身についていない

この評価を踏まえ、本校のDP技能①②について、新カリキュラムや授業によって何をどのように実現するのかを考えたい。

「授業でやったことがある」と「自らできる（身についている）」は別物と考え、卒業時に最低限、なにをどのくらい「自らできる」ようになっていけばよいのか、専門家としてのご意見を伺いたい。

本校のDP技能

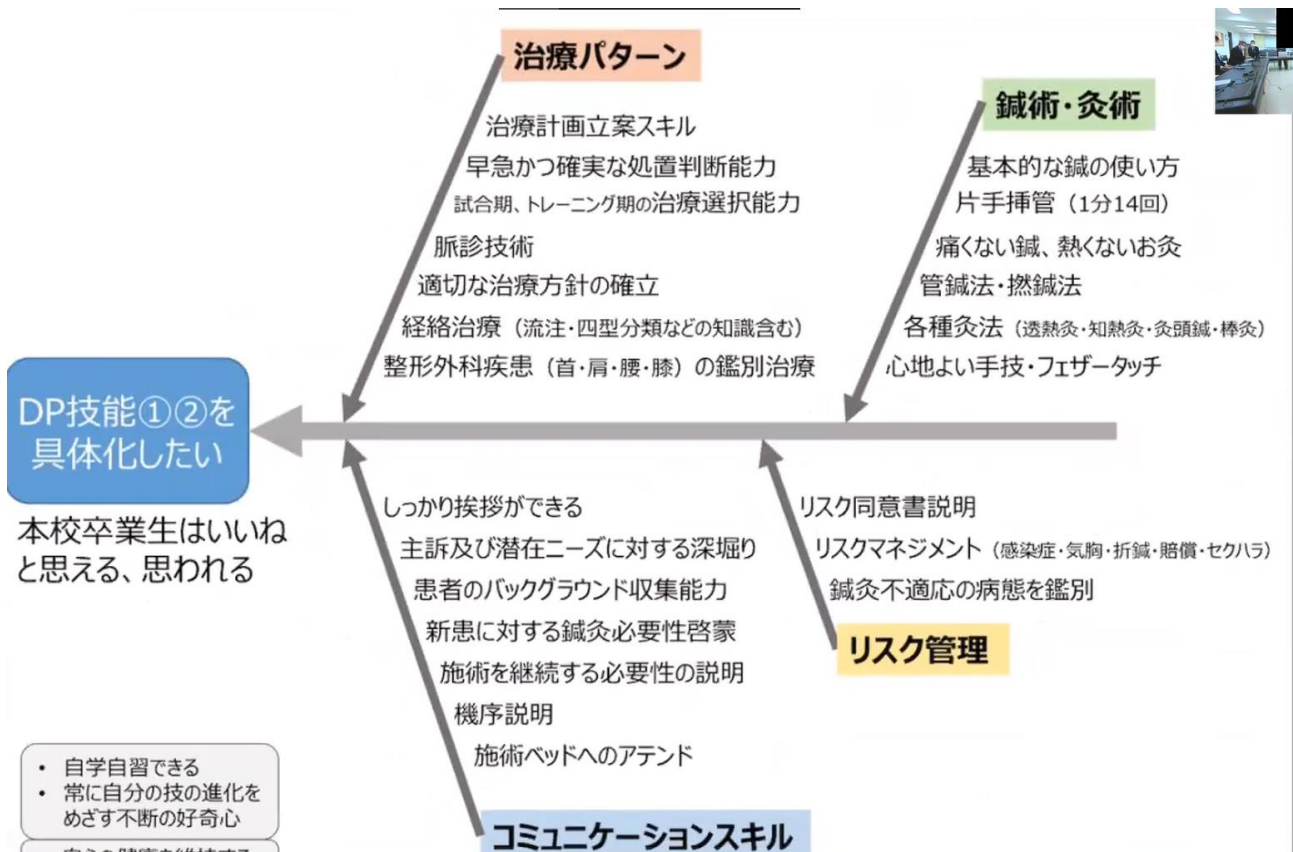
- ①エビデンスに基づいた判断・施術・評価に必要な技能を身につけている。
- ②伝統医学の理論体系に基づいた判断・施術・評価に必要な技能を身につけている。

事前ヒヤリングとして

勤務鍼灸師について	前田真也先生
開業鍼灸師（卒後すぐ開業）について	鈴木幸次郎先生
スポーツ現場で活動する鍼灸師について	藤原良次先生
「生涯鍼灸師」になるために	松田博公先生

各分野において、卒業時に「自らできる」ようになっておきたい技能（鍼灸臨床での判断・施術・評価）をお尋ねした。

本会議ではいただいたご意見を「治療パターン」「鍼術・灸術」「コミュニケーションスキル」「リスク管理」に整理して進行した。



1. 治療パターンについて

学校卒業時には1つの治療技術をマスターしていた方がよいのか、様々な技術の紹介や共通する汎用性のある基本的な技術をマスターしていることが望ましいのか。

■勤務鍼灸師としての観点で（前田先生）

臨床実習でできるか、できないかについてはどれだけ反復練習をしたか、実際に即した練習をどのくらいしたかによると思う。学生時代には様々な治療技術に触れることができる機会だと思う。就職後は自分の軸を決め、そこから拡張していくのが望ましいと思っている。

（学校からの質問）技術の「できる・できない」が採用の決めてとなることはあるのか？

（前田先生のご回答）

学生の時点でひとつの技術を完全にマスターできることは難しいと考えているので、「（ひとつの技術が完璧に）できる・できない」ということが採用の判断基準には（当社では）ならない。

■開業鍼灸師としての観点で（鈴木先生）

鍼灸院に来院される患者のほとんどが「整形外科疾患」を持っているので、卒後すぐに開業するのであれば、「首・肩・腰・膝」の疾患の識別ができて治療ができるとよいと思う。治療アプローチは現代的なものでも、中医でも、古典でもよいと思っているが、学校教育の中でこの3つを完全に身に着けることは難しいので、学校としてはいずれかに絞って指導する方法でもよいと思う。また、リスクマネージメントの観点と中には解剖学的知識がある患者様もいらっしゃるため、ある程度の解剖的知識は必要だと思っている。

（学校からの質問）授業内でどのように指導すれば、卒後すぐ開業医としてやっていけるのか？

（鈴木先生のご回答）

実技だけではなかなか難しいところではあるが、臨床各論（講義）とも結び付けて学習することも大切であると思う。

■スポーツ現場で活動する鍼灸師という観点で（藤原先生）

様々な手法を学んで卒業してきてほしいと考える。スポーツ現場でも治療院でも同じだが、基本的に学んでほしいこととして、「治療に入って一から最終的に患者さんを見送るところまで」これが一人でできることを学んでほしい。その他、迅速な判断をする、治療方針を立てるということがあるが、スポーツ現場においても「私はわかりません。できません」というのが一番困る状態である。職業能力の学校であるので、上級の技能の習得ではなく、最後まで一人で治療できる能力を身に着けて来てほしい。その能力の高い・低いについては後からの判断になると考える。

（学校からの質問）

臨床実習において、学生がつまずくところは「情報収集」「治療計画（なにをしたらよいかわからない）」ということだが、具体的にどのような学習が思いうかばれるか？

（藤原先生からのご回答）

自分が学生の頃は「臨床医学」や「経絡の具体的な疾患」について重要視して学んでいこうと思っていた。現在もアクティブラーニングを進めているとは思いますが、学生がひとつの完結した考えを持つことができることが重要であると考え。解剖学や生理学等は重要科目を学習しなければならないが同時に暗記科目でもある。それとは別に、症例を出して「上手い・下手、知識の高低」ではなく、自分の意見を完結させるという授業などがあると思う。スポーツ現場では困難な場面が多々あるが、結果的に「答えがでない」ということも多々ある。そのような場面では「なんとかする」ということも大事になってくるため「自分の意見を考える」学習では「考えても答えがでない」こともあることを学習させておいていただけると非常によいと思う。

■様々な鍼灸師を間近で見えて来られて（松田先生）

鍼灸学校として国試対策をのぞく正味2年半の中で何ができるかを絞り込まなければならない。理想は理想として高く掲げるのは大切である。先ほどの意見の中で、「整形外科疾患の識別ができるよ

うになるということ」と、一つ一つの授業において「完結させることが重要である」ということに変え共感した。

授業では、例えばひとつの疾患について、中医ではどのようにするのか、現代医療ではどのようにするのか、経絡治療ではどうするのかをきちんと完結して伝えることにより、今度は学生自身が、鍼灸治療の全体像のイメージを持ち、他の病態についても考えてみるができるようになると思う。ある病態に関して「できる」ようになれば、美容、スポーツ、慢性疾患にも応用できると思う。その最初のステップを学校教育でつくることができると思う。

また、学校教育の中で、伝統鍼灸治療における脈診技術の重要性、歴史を教えていないことが非常に残念である。歴史的物語を通して脈診の重要性、体の仕組み、あり方を学び考えることができ、脈診というひとつの完結した授業を行うことにより、スムーズに経脈にすぐ移行できると思っている。

(学校からの回答)

学校教育としてすべてを網羅していなくてもよいということはまさしく目から鱗が落ちたと感じている。ひとつのことを突き詰めていってもさらにその分野にひろがりを持たせて考えていくことができるということがよくわかった。また1回の授業を完結させるということについては日々の授業を作る上でより意識して取り組んでいきたいと思った。

■ひとつの完結した授業を行うという観点から（寺裏先生）

授業自体が「一人の医療人として患者の役に立ってほしい」ということがよく理解できる構成になっていれば、無理やり国家試験に合格するための知識・技術を詰め込む、学ばなければならないという世界観から脱却して、自然的に「自ら学ぶ」という意識になるのではないかと考えている。あくまでも学校は生涯学ぶための「土台」であり、その土台の種が上手く発芽できる場所をつくること、学生が残りの人生において学び続けることができるようになることが非常に重要だと思っている。

2. コミュニケーションスキルを学校の中でどのように磨いたらよいかについて

(学校からの質問)

臨床実習において学生間で「模擬患者」となって実習しているわけだが、実際にはあまり臨場感がなく、よそよそしい感覚があり実際の臨床に役立つのかという疑問も湧く。実際に活かした授業にするために、どのような工夫が必要と思うか？

(委員からの回答)

ひとつのスタイルにとらわれず、まずは学生に様々な意見を出してもらい、その意見についてみんなで考える。様々な意見や見方があることを知るのも勉強のひとつであると思う。例えば「腰痛」と聞いて、すぐに腰痛の検査をはじめの人や、その原因となった行動を探る人もいる。様々な考えや意見をかかわすことにより適切な治療方法を見極めるきっかけにもなると思う。先生方にはその意見交換が上手く運ぶように意見の引き出し役になって進めていただくこともひとつの方法であると思う。

(学校からの質問)

学校教育となると「理論の掘り下げ」になりがちだが、実際の医療現場ではロールプレイングも重要だと聞く。実際にはどうか？

(委員からの回答)

当社でもやっているが、ロールプレイングはなかなかリアリティにかけるやりとりになりがちである。そこで、実際のやりとりを録音してその音声をみんなで聞いて「ここで、症状についてもう一つ深堀する質問をしたほうがよかったね」と意見交換を行っている。また、新人の方には自分のやりとりの録音を文字おこししていただくことにより、質問に対して適切に答えていないことや説明不足がわかったりする。文字おこしの段階で課題意識が生まれる。そういう方法もある。併せて、社内においてコミュニケーションスキルには「聞く力」が大切だと話している。「深堀り」が大変重要である。研修において、やや形式的な形にはなってしまうが「3 WHY」というキーワードを作り、3回深堀りをするをしている。そのことにより潜在していたニーズや症状が顕在す

ることができたりする。「3～」という言葉を作ると浸透しやすいかもしれない。

(委員からの回答)

以前にもお話したことがあるが、患者様をお迎えし、見送りするまでの流れを考えても「挨拶」が重要であるとする。学校内で教職員どうし、学生どうし、学生と教職員どうしが挨拶しあえる環境は非常に大切だと思う。

(委員からの回答)

挨拶の重要性について同感である。これは学校全体が「鍼灸師を育てる学校」になっているかということである。また、コミュニケーションの授業を受けたからといって、コミュニケーション能力が高まるわけではなく、その学生の全生活が「鍼灸師」に向かっているか、なっているかということが重要である。学校にいるときは、「鍼灸学生」として、外に出れば、食生活や生活スタイル荒れてしまえば、コミュニケーションスキルもなにも浮かばないと思う。まずは教職員が授業や医療面接の場を通して、「鍼灸師」としての生き方、スタイルの模範を見せてその中でコミュニケーションスキルというものを指導していくことが重要であるとする。

(委員からの回答)

授業内での会話が重要であるとする。また、学生の中には講義内容が理解できない学生もいるかもしれないが、知っている言葉を繋ぎ合わせてなんとか理解しようとしている。繋ぎあったときにひとつの知識が形成されたりする。よって日頃授業をいかに「学生に聞いてもらうか」が大切であるとする。

3. コンピテンシーについて

寺裏先生より以下のとおり発表があり、今回の協議内容と重なりあう部分が多々あった。重要と思われる点についてはやはり委員の先生方のご認識が共通されていることを実感した。



卒業時に身に付けておきたいコンピテンシーと卒前教育

2020年2月25日

主体的に生涯学び続ける力

- 患者様に貢献したいという「志」に基づく新たな知識・技術を身に付けたいと思う好奇心・探求心
- 常に知識・技術は進化し続ける、資格要件、卒業要件以上の最新の知識・技術を更新し学び続ける力
- 患者様のためになる多様な関連知識・技術を常に学び提供できる力

教育の方法をAI型に

コミュニケーション力

- 心地よい笑顔と挨拶 患者様を敬う気持ち
- 患者様の話を引き出し、様々な考えを受容し、適切に伝える力
- 適切な知識・情報や多様な話題を提供できる力

普段の授業で実施

コーチング力・カウンセリング力

- 患者様の悩みや課題を引き出し、受け入れ、本質的な課題を導く力
- 患者様の在りたい姿を患者様から引き出し、目標を設定し、行動に結び付ける力
- 患者様に医療受持者として指導するだけでなく、一緒に目標の姿を目指す姿勢

教員がコーチングを実践し学生にも育成

稼ぐ力・マーケティング力

- マーケティング、広報、SNSの活用ができる能力
- 目標を行動化し、PDCAサイクルで動かす力
- 患者様から信頼され、次の患者につなげる力(信頼、評判、紹介、継続)

経営・マーケティング科目の設置

以上